

沖縄本島にて検出せる広節裂頭条虫 *Diphyllobothrium latum*について

沖縄公害衛生研究所 国 吉 真 英
那覇市仲地外科医院 仲 地 紀 良
コザ保健所病理検査室 比 嘉 盛 幸

1 緒言

広節裂頭条虫は鱒を中間宿主とする関係上我国に於ては、北海道、北陸、京都府下、利根川沿岸、岐阜高山地方の住民に多く見られた。沖縄に於ては鱒が分布してなく、広節裂頭条虫の発見報告がこれまでにない。

私達は1960年2月沖縄本島コザ保健所管内の結核在宅治療中の1患者の糞便から本虫の体節と虫卵を検出した。これが沖縄に於ける広節裂頭条虫の最初の検出ではないかと思ひ、寄生虫学上興味ある1例だと考え、こゝに報告し先輩諸賢の御批判と御教示を仰ぐ次第である。

2 調査概要

著者の1人比嘉は1960年2月沖縄本島与那城村平安座島出身の伊○栄○、男子、29才の提出した糞便を検便したら広節裂頭条虫らしき虫卵を検出したので、虫卵を同定してもらうべく患者の検体を当所へ持参して来た。

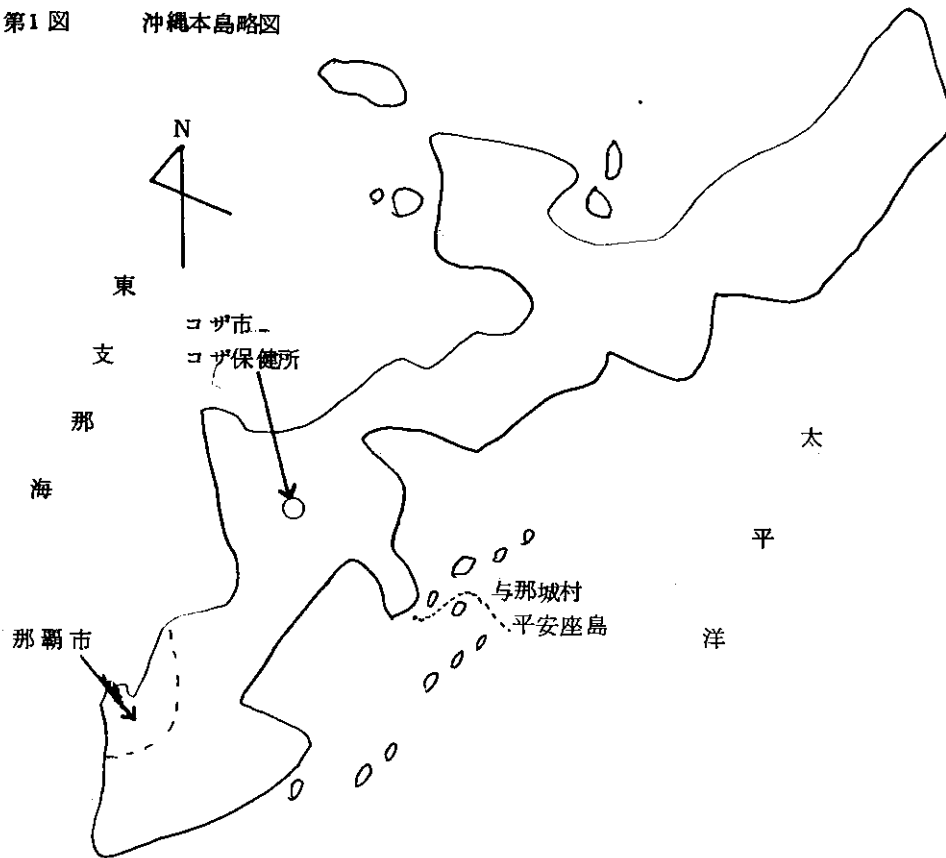
私達は検体より普通塗抹標本を作製鏡検したと

ころ、1視野中に楕円形で淡褐色の前極に小蓋のある広節裂頭条虫と同形の虫卵が20個以上検出された。比嘉は2日後再び患者からの検体を持参して来たので、前回同様標本を作成し鏡検したが1視野中に多数の広節裂頭条虫卵らしきものを検出した。尙患者の糞便から排泄された長さ2~3櫃の体節2個体を持参してあったので、圧平標本を作製し鏡検したところ産卵門付近に数個の本虫卵らしき卵を検出した。

S. M氏液(佐々、三浦氏のグリセリン寒天液)で虫卵を固定封鎖し、尙体節は10%フォルマリン液で固定しスライドグラスによる圧平標本にして、日本大学農獣医学部寄生虫学教室の谷口守男教授に同定を依頼したところ、1960年4月広節裂頭条虫 *Diphyllobothrium latum* (Linne, 1758) と同定された。

1960年6月コザ保健所の砂川勝美医師は患者をコザ病院に入院させ、フィルムロンで駆虫を行った所約4米24cmの虫体が完全に排泄された。

第1図 沖縄本島略図



第2図 患者より排泄された広節裂頭条虫々体 (著者原図)



3 考察

患者は1955年より眩暈，息切れ，疲労感，頭重感，耳鳴等の貧血症状を訴え，1959年9月結核予防検診で軽症の結核症の診断を受け在宅患者として加療中であつた。

患者は沖縄本島東部の与那城村の離島平安座で生まれ，全島で成人し沖縄本島から本土その他の地域に1歩も出たことがなく，又沖縄近海で捕獲された魚貝類以外は摂食したことがないと云う。広節裂頭条虫の中間宿主の分布してない沖縄で本虫が検出されたと云うことは寄生虫学上興味ある問題を提供したもので，沖縄に於ける本虫の中間宿主の分布については今後の調査に俟ちたい。

4 結語

私達は1960年2月コザ保健所管内の結核在宅患者から広節裂頭条虫の体節の1部と虫卵を検出した。中間宿主の鱒が分布してない沖縄に於いて

本虫が検出されたことは寄生虫学上非常に興味ある1例だと思ひ茲に報告した次第である。

終りに臨み，虫体の同定並びに御指導を賜つた日本大学農獣医学部寄生虫学教室の谷口守男教授並びに本虫の標本供覧に便宜を与えて下さったコザ保健所の砂川勝美医師に深謝の意を表す。

参考文献

- 1 佐々学著(1956)：日本の風土病，法制大学出版社発行
- 2 森下哲夫，加納六郎著(1963)：新寄生虫病，南山堂発行
- 3 砂川勝美(1965)：広節裂頭条虫症の治験例(十二指腸ゾンデ使用によるファイルマロン投与)，沖縄医学会雑誌 Vol. V Ⅱ 1, 42 ~ 44
第2回沖縄公衆衛生学会総会(1971)記録集掲載

沖縄県下における人のフィラリア防圧 の歴史的概説

衛生動物室 国吉真英

沖縄におけるフィラリア症の研究は，古くは1911年峰直次郎，望月代次先生らによって着手され，鱒平名紀勝，鱒平名紀秀，仲地紀晃，比嘉賀善の諸先生，その他県内外の先輩学者によって調査研究された。

特に1937年～1948年に亘って吉野，

大浜，西郷の3博士らによって，沖縄，宮古，八重山の各諸島における本症の疫学調査が広範に行なわれた。然しながら今次沖縄戦により本症の調査研究も一時中断のやむなきに至った。尚沖縄県下における戦前の糸状虫症の調査成績は第1表の通りである。